
何もしない夏の日

イナ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

何もしない夏の日

【コード】

N1821F

【作者名】

イナ

【あらすじ】

やる気の出ない俺に、幼なじみの紗帆は「今日は何もしない日にしよう」と提案した。俺と彼女のゆるゆるな夏の日。後日談「何もしない冬の日」もあり。

何もしない夏の日

第一話

俺は床にごろんと寝転び、携帯電話を放り出した。
新着メールを確認できないままで。
今日は何もしたくない。

夏半ば。

俺、吉野充の通う高校も、もちろん夏休み中だ。今日は遊びに行く予定もなく、うだるような暑さの家で自堕落に過ごしてる。庭から聞こえる蝉の合唱はうるさくて、扇風機の風はぬるくて。
まあ、いわゆる普通の夏だった。
と、思ったところへ。

「ぴんぽーん。ピンポーン」
ほにやっとした声が玄関から聞こえてきた。

……紗帆か。あいつまた、インターフォン鳴らさずに口で言っ
てやがる。気が抜けるったらありやしない。

夏真つ盛りだというのに、紗帆の頭は年中春だ。

「開いてるから、勝手に入れー」

部屋の窓が開いてるから、外にいる紗帆に十分聞こえるだろう。
しばらくすると、階段を上がる足音がする。足音は俺の部屋の前で
止まるどころか、そのまま遠慮なく部屋の中へとやってきた。この
くそ暑いのに何の用だよ。

「おい、みーさんの好きなスイカ持ってきたよー……ってなんじ
やあこりゃあ」

勝手知ったる、といった感じでやってきた紗帆は、ゆるい驚き声
をあげた。四分の一にカットされたスイカを手をしている。あ、ス
イカさん、ようこそいらっしやいました。

漫画や雑誌に埋もれつつ、ベッドに足をあげて頭を床に寝ていた
俺は、のろのろと頭を声のほうに向ける。

筋肉は存在してんのか、と思うくらい細い足は、膝小僧だけちょっと赤い。また正座したまま身を乗り出してゲームしてたな。膝の少し上で揺れているスカートはワンピースになっている。ノースリーブの肩には、ふわふわと波打っている髪がかかっていた。一番目立つのは、好奇心たつぷりの瞳。

紗帆は面白いものでも見つけたように、目を輝かせていた。

「わー、雪崩で負傷者発見」

雪崩が本で、負傷者は俺か？

「早速救助にあたりますっ」

紗帆はスイカを机に置き、ふざけた言い方をしつつも、俺の足もとの雑誌を片付けてくれている。嬉しいけど、救助するのは負傷者じゃなくて雪崩の方だよ。

昔から紗帆は俺の世話をよく焼いてくれた。母親が死んでからは、日々の細かいことに手が回らない父親のフォローまでしてくれていた気がする。

これは黒歴史として闇に葬りたいのだが、こいつに風呂に入れてもらった記憶まである。同い年なのに。思い出だけで悶え転がれるぜ。

紗帆と会ったたびに、最近……なにかそのままの自分でいちゃいけないって気分させられる。それがなぜなのか、わからないけど。

とりあえず紗帆に片付けさせっぱなしというのはいかんな。俺も、開いたまま放置されてた雑誌を手にとる。隣で紗帆が、何かに気づいたようにくすくすと笑った。

「ふふ、みーさんはやっぱり美容師さんになるの？」

「そうなのか？」

「わたしが聞いているのにー。だってさ、ほら、ヘアスタイルの本いっぱいあるんだもん。みーさんの頭はいつもぼさぼさなのにね」

「美容師ねえ。進路、どーすっかなー……」

俺は、ぼさぼさだと指摘された髪をなでつけながらつぶやいた。

そう言えば夏休み明けに学校で進路相談会あるんだっけか。でも

親父は県外に単身赴任中だしな。そもそも、あの人は俺の進路なんか興味ねーだろーし。

あー、やる気がますますなくなってきた。部屋もきれいになったことだし、と俺はもう一度クッションとともに床に転がる。

「のどが渴いたけど冷蔵庫まで行くのもめんどくせー……」

「そこまで重症なの？ どれどれ」

紗帆は近くにちょこんと座り、俺の手を取って脈を測り始めた。

「あれ、みーさん、脈ないよ？」

「あほう。お前の測り方が下手なだけだ。ほら、親指側の下のところを押さえてみるよ」

「ああ、あつたあつた。みーさん、ちゃんと生きてたんだねえ」

「生きててすいませんねー」

「わ、すねちゃった。どうやら深刻なナメケモノ病にかかっているようですな」

俺の手を下ろした紗帆は、しばらく何か考えていたようだったが、すぐに表情を明るくした。

「じゃあ治療しなきゃ！ 今日『何もしない日』にしようよ。ね？」

「『何もしない日』？」

何だ、そりゃ。

第二話

「だから、こうしてー」

紗帆は自分用のクッションを確保して、俺の隣にごろんと寝転がった。

「なーんにもしないの」

俺のほうを見て、紗帆は緊張感のかけらもない顔で笑う。おいおい、無防備すぎるぞ。

まあ、二人でゲームしてて気がついたら朝、なんてこともあるから、紗帆にとってはいつものことかもしれないけどな。それにしたつて。

なんてーか……ケロツとして男の横に寝転がれるなんて、意識されてないんだろな。

よくわからんけど、ちよつとイラつとした。今。

「……で、そんだけか？」

不可解な気持ちをいちいち考えててもしよーがない。ひとまずそれを脇に押しやり、紗帆に『何もしない日』の詳しい説明を求める。

「あ、今そんだけか？ とか言いましたね？ みーさん、ホントに何にもしないでいられるかなー。何かしたら罰ゲームですよ？」

「罰ゲームってなんだよ」

そーだねー、と紗帆は頬に指をあてて考え込む。そのあと自分の膝をポン、と叩き、

「じゃあさ、膝枕して、絵本読んだげる」

罰ゲームには結びつきそうもない言葉を聞いて、俺は思いつきりむせそうになってしまった。

「ど、どう言う嫌がらせだそれは」

「だって罰ゲームだもん。嫌がらせだよー」

紗帆はクッションに顔を埋めて、ふう、と息を吐いた。

「夏休み入ってからさあ、保育園にボランティア行つてなくてさあ。

幼児成分が足りないんだよねー」

「そんなら公園で遊んでるガキ捕まえて、てきとーに膝枕させるよ」
「通報されちゃうでしょー」

紗帆みたいなの、のほほんとしたやつを通報するヤツなんてそうそ
ういらないと思うけどな。逆にガキがうじやうじや寄ってきそうだ。

「つか、おれ幼児じゃないし」

「中身は立派な幼児ですがなー」

楽しそうに俺の肩をばんばん叩いてやがる。痛えよ。

今さら、膝の感触に興味があるなんて言えない。惜しいことした、
かも。

「だって、つまないんだもん。小さいころはよく頭なでてあげら
れたのに。今はなでさせてくれないし。伸びしないと届かないし、
つまない」

「いや……普通の高校生男子の心情も考えてくれよ」

ふーん。こいつにとっては、俺はもう用なしってわけですか。へ
ーえ。

「あ、みーさんたら、もう何もしないの始めちゃってる！ ずるー
い、わたしもわたしもー」

俺の気の抜けた態度を、『何もしない日』への参加表明だと受け
取ったらしい。紗帆は動きをピタリと止め、静かになった。

蝉の声が、再び大きくなる。

けどこの部屋だけは、沈黙に包まれていた。俺と紗帆の二人だけ
が、どうか違う国にでも行っちゃったみたいだ。

それにしても、静かだな。紗帆、寝てんじゃねーだろーな。

隣を見る。目を閉じた紗帆は、呼吸で胸が上下している以外、ぴ
くりとも動かない。

カーテンの影が紗帆の頬にかかって、幻想的な空気を作り出して
いた。

手を伸ばしたら、届きそうだ。

しかしよく考えたら、いつもこのくらいの距離にいるじゃねえかと気づく。どうして今だけ、そんなことを考えて緊張するんだろうな。謎だ。

手を伸ばしてみる。もう少しで、紗帆の髪に触れる。やわらかい髪に。

「みーさん？」

「！」

俺はその場で五センチくらい飛び上がりそうになった。ああびつくりした。起きてるなら起きてると言えよ、まったく。

「なんだー？」

驚きを必死に隠して、普通の声で返事ができたと思う。

「あのさ、海の底にいるみたいだねえ」

それにはちよつと、同意する。風にゆれてるカーテンが青いせいがか、水底のような雰囲気をかもしだしていた。でも、意地の悪いことを言ってしまったいお年頃の俺。

「ホントに海の底だったらこんな悠長にしてられないだろ」

「え、人食いオクトパスに食べられちゃうとか？」

「どこの海だよ、それは。俺が言ってるのは、息できねえで苦しいつてことだよ」

「ぐ、ぐわあああ」

紗帆がいきなり、全力で脱力するような叫び声を上げて、喉を押しさえ暴れ出した。

「いきなりなんだよ、こえーな」

「ちよつとリアルに海の底にいるわたしを演じてみた。脚本・演出、吉野充」

なぜか得意げに俺のほうを見ている。いつの間に俺が二役こなしてんだよ。

「俺が演出なら、声は出さないで演技で表現するな」

「こつですかっ」

頬を膨らませる紗帆。

何もしない夏の日

「その顔、人食いオクトパスか？」

「えっ、みーさん、人食いオクトパスのこと知ってんの？」
「知らねーよ。つか、知りたくねーよ」

どこまでも、ゆるい時間だった。

第三話

会話が途切れ、俺たちはまた、『何もしない日』を続行する。その静かな空気にまぎれるようなささやき声で、紗帆は話し始めた。

「みーさんは海の中で、いつも一人で怖くなかったの？」

突然変なこと言うんだな。意味を計りかねる。俺は首をかしげて紗帆の顔を見た。

「どういうことだ？」

「このお家、一人だと結構広いよね」

そういうことか。一人で寂しくないかってことだよな。

俺んちは、父一人子一人の家族だ。親父は帰宅時間が遅かったから、必然的に一人の時間が多かった。もともと会話もあんまりしねえし、昔から一人暮らしのようなもんだ。だから一年前に親父が単身赴任で県外に出たときも、それほど違和感を感じなかった。

「え？ そりゃ、ガキのころは寂しいって気持ちはあったな。今は……家に誰かいてもうるせーだけだっと思って思っちまう。生活習慣の違いでぶつかったりさ。なら、一人のほうがいいかもしれんな」

「そっかあ」

紗帆は納得したようにうんうんとうなずき、さらに言った。

「たぶん、さ。ちょっとしたことなんだよ。人って優しい言葉の一つかけられただけでも、相手に対する印象って変わるものだよ」

……何のこと、いつてんだ？ 話がつながってないような気がする。

もしかして、親父ともうちよつと仲良くしろって言いたいのか？ そうだとすると、紗帆にしては珍しい言い分だ。こいつは普段、俺たち親子の関係について口を挟むことはない。いつもつかず離れずそばにいる感じだ。

結局、紗帆に言葉の真意を確かめることはできなかった。わから

ないまま、今の言葉が頭の中にぶら下がってる。

わからないくせに、何だろう、何か、ムズムズする。

「紗帆」

「はいよー」

思わず声をかける。打てば響くように、紗帆の返事がきた。

すると、ムズムズした気持ちがなぜか落ち着いたように感じた。

「紗帆か」

「もう、なーに？ わたしですよー」

俺の気持ちを動かすのも、元通りにするのも、紗帆、お前なのか。当の紗帆はと言えば、再び目を閉じて、何もしないことを満喫しているようだった。

時々急に、大人びたことを言うんだ、こいつは。ずっと昔から中身は大人なのかもしれないけどな。少なくとも、俺よりはずっと。

俺なんかホントはいつも、しゃべらない親父のことでイライラしてばかりだったから。

五分くらい、文字通り何もしないでいた気がする。

いろんな考えが泡のように浮かんで消えていった。ほとんどはくだらないことだけど、そのなかで、ちよつと有益なことを思い出した。

「あれ、駅のPCショップ、USBメモリの特売やってるの今日だったかな」

昨日の新聞のチラシで見たような気がする。新聞は、一階だけか。ちよつと見てくるかな。

「こらあ、何もしないんでしょ」

起き上がりかけた俺の襟首を捕まえる手があった。『何もしない日』の執行者、紗帆だ。

「確認するくらいいいーじゃんかよ」

「何かしたら罰ゲームっ」

「罰ゲーム……ところで、俺が勝った場合の罰はどーすんだ？」

「膝枕じゃないの？」

「おい！ 俺はしねーぞ。反対だ」

想像しただけで暑さが倍になったぞ。恥ずかしすぎるだろ、普通。紗帆は恥ずかしくないのか？

「そだね。男の子の膝なんて硬そうだし、つままないよねー」

「あいな……」

あっさり意見を変えるのかよ。この湧きいづる恥ずかしさをどうしてくれるんだ。

「じゃあ、新しい髪型の実験台はどうだ？」

それならばと、俺にとって都合のいいことを提案してみた。紗帆のくせつ毛見ると、無性にいじりたくなるんだよな。

「えっ、ホント？ それいいね。わたしもやってもらいたい」

「何だよ、嬉しいのかよ。ならやめる。罰ゲームにならないじゃねーか」

「あーうそうそ、嬉しくなんかないよ。もう、やだなあ。サイアクだなー」

そんなへらへらした顔で言われてもあてにできねーけどな。まあいいか。

「ああ、安心しろ。罰ゲームにふさわしい、スペシャルな髪型にしてやるぜ」

「ええっ、ど、どんなんだろ……気になるー。メデューサとか、そんなの？」

「……どうやって髪を蛇に見せるかが腕の見せ所だな」

「あれっ？ メデューサで思いだした！」

急に紗帆が大声をあげる。耳元でわめくなよ。

「こないだ貸したゲーム、二番目がわたしのセーブだからね。まさか、消してないでしょうねー」

「え、どうだったかな」

「うわ、確認したい」

飛び起きそうになる紗帆の腕を、俺は捕まえた。今度は俺の番だ

ぞ。

「何もしないんだろ」

にやりとしながら言ってる。

「ううっ……」

紗帆は泣きそうな顔で、もといた場所に寝転がった。

こんな風に俺たちは、お互いを監視しあっていた。アホだなあ。

第四話

「もう、こうなったら命がけでなにもしないっ！」

やりたいと思ったことをことごとく俺に阻止されて、紗帆はブチ切れていた。俺だつて紗帆にいろいろ邪魔されてんだけどな。

「おいおいおい、なんか趣旨が違ってきてねーか？俺のナマケモノ病を治療するんじゃないかねーのかよ」

「ナマケモノ病？ ええー、そんな変な病気あるわけないよねー」

紗帆はわざとらしく驚いた声を出す。むかつくなー。

「お、ま、え、は、な〜」

言葉に合わせて、紗帆の二の腕をつついてやる。どうだ。

「あははははは、くすぐりたいからやめてよー」

紗帆は俺から逃げようと、壁のほうまで横に転がっていった。しかしまた、同じように転がって戻ってくる。手巻き寿司かよ。

「ああ、いい汗かいたっ」

ずいぶん楽しそうだな、紗帆。

「お前、さっき言ったこと忘れてるだろ。命がけで何もしないと聞いてきたのは気のせいかな？」

「て、てへっ」

ベタに頭をこつん、と叩いたりしてやがる。

「そーゆーことをして許されるのは、萌えキャラだけだ。お前にその資格はないぞ。笑ってごまかすな」

「うつつ………わかったよ。ごめんね、みーさん。わたし、もっと萌えを研究するよ………！」

「そつちを反省するのかよ！」

あれ？ 何の話をしてたんだろうな。脱線しすぎた。ああそうだ、

『何もしない日』のことだった。

「大体な、くつちゃべってたら、何もしてないことにはならないんじゃないか？」

「え？ あ、そうかな。じゃあ、口だけは別、ってことでどうでしょう」

手でごまをする仕草をしながら、紗帆は俺の顔をのぞきこんだ。

「調子いいな」

「ええ、調子は絶好調です！」

「その調子良さじゃなくてだな」

手をあげて宣言する紗帆に、俺は脱力したまま突っ込んだ。

ルールを変えつつ、というか無視しつつ、まだまだ『何もしない日』は続きそうな予感。

……やな予感だな。

天国なのは、首振り扇風機の風が自分に当たる一瞬だけだ。やっぱり、エアコン買えば良かったかな。前のが壊れてから放置しっぱなしなんだよな。エコな生活を送るのも限界だぜ。

部屋の温度とは関係なく、紗帆の声は相変わらずのほほんとしていた。

「暑いねー」

「暑いな」

俺はうなずかずに、返事だけする。

「アイス食べたいねー」

「食べたいな」

さつきと同じく、小声で返事だけ。そんな俺の態度に、紗帆は不満そうな声を上げた。

「わ、オウム返しばかり！ もっとこう、話を発展させようとかいう心づかいはないのー？」

「わかってないな、何もしない日なんだから、いかに無為にすごすかがキモだぞ。俺の方が返事もおさなりで力いっぱい無為だから、ポイントプラス六な」

「うわ、やばい。どうすれば逆転できるかなあ。息止めたらポイント

ト十くれる？」

「死んだ奴にはポイントやれねーからゼロだな。てか、そもそもポイントってなんだよ」

「みーさんが言いだしたんじゃないか」

紗帆は足をバタバタさせて文句を言った。

「おい、足、見えるって」

「変なの。最初っから足なんて見えてるのに」

そうじゃない、そうじゃないんだ……。

はじらいのかけらもない顔の紗帆は、俺の気持ちを全くわかっていないようだが。

足っつーか、太ももが見えたんだ。ほんの一瞬の出来事だったけど、俺の目は高性能カメラの如く、その場面をとらえたんだ。

紗帆のやつ、ガキの頃は折れそうなゴボウ足だったくせに、いつの間にそんなことになってんだよ。詐欺だろ。

ああくそ、一番いいシーンが頭から離れんじゃないか。変態と言われそうなのでとても指摘できんが。ああくそ、以下、エンドレス。

ポイントについての協議は結局、うやむやのうちに終わった。まったく無駄な時間を過ごしてしまった。……って、今やってる『何もしない日』が一番無駄じゃねえか。なんだかな。

それでも、なぜか無駄じゃないと思う自分もいる。紗帆とバカやってるおかげで、ちよっとだけやる気が回復したような気がしないでもないしな。

「見てみてー」

呼ばれたので素直に見ると、紗帆は寝ころんだまま横向きになって、体をくの字に変えていた。

「今、三時半ー」

なんだって？ ああ、自分が時計の針になりきってたんだな。

……あほか。やっぱりやる気が全部抜けてったかも。

「だったら俺は六時ちようどだ」

俺は少しも動かず、仰向けに寝た姿勢のままですべて言ってる。

「あ、楽しんでるー」

「お前が勝手にやり始めたんだろーが」

「わたしの腹時計は三時ちょうどー」

もう、何が何やらわからんぞ。ん？ 腹と言えば……。頭に浮かぶものがあつた。

「そう言えば、スイカは？」

「忘れてた！」

飛び起きる紗帆を、今度は止めないことにする。何せ、非常事態だ。

ああ、今日の来賓、スイカ様を忘れるとは、なんて罰当たりな。

机を見ると、果たしてスイカはそのままでいらつしゃつた。動いてたら怖い。

「ああつ、今は『何もしない日』だから、もしかしてスイカも食べられない？ ショックだなあー」

紗帆は残念そうな顔で机に肘をつき、スイカを眺めている。

「はは、まさか。スイカ食うときはタイムだろ」

俺は当然のように、自分に都合のいいルールを決定した。そんな俺を見て紗帆は文句の一つも言いたそう顔をしている。何だよ、お前がどう思おうと、俺とスイカを引き離すことはできんぞ。

「もう、みーさんてば調子いいなあ」

「そう来たらこの言葉だろ。」

「ああ、調子は絶好調だ」

「わ、みーさん、人のセリフ取つたー」

どうやら、俺も紗帆と同レベルになつちまつたらしい。もう怖いもんはない気がするぜ。

第五話

スイカタイムの始まりだ。

いそいそと俺たちはスイカ様を連れ、キッチンへと向かった。

食器棚から皿を出していると、紗帆が不思議そうな声で俺に質問をしてきた。

「コップ、普段使ってるやつ、一つになってるよ？ おじさんのは何？」

「ああ、何か、割っちゃまって。親父も気にしねえとか言っしよ」

「そっかあ。お客さま用のをおろせば大丈夫だもんね」

親父、ちよつとくらい気にすればいいのに。

コップが割れた時、そんなことを思った気がする。

ホントはわざと割ったのかもしれない。親父の反応に期待してたのかもしれない。怒らせて、こっちを向かせたかったのかもしれない。

どんだけガキだよ。高校生だと思えねえな、俺。

単身赴任の親父。もともと私物の少ない人だから、ここで暮らしていたという証拠さえ消えつつある。

俺は、寂しいと思っていたんだろうか。本当は。

気のせいかな、俺はいつもより冷静に自分のことを見ていた。いつものように、親父のことを思い返すたび湧き上がるいらだちが、おさまってる気がする。なぜだろう。もしかして、紗帆の治療が効いたんだろうか。

治療ってつまり、ひたすらだらだらして、くだらん罰ゲームを決めて、アホ雑談することか？

うわ、そんなものが効いたかと思いたくねえー。

居間の窓から庭のほうに足を突き出し、ぶらぶらさせながら、二人でスイカを頬張る。

縁側があればいい雰囲気なんだけどな。庭はあまり手入れしないせいで雑草が伸び放題だったけど、それなりに風情はあった。蝉やら、鈴虫やら、他のよくわからん虫もいるしな。

隣の紗帆は、鼻歌を歌いだしそうなきげんさで、二つ目のスイカに手を出している。

「スイカって、冷やしすぎないほうがおいしいね」

「そうだな、食べごろだ」

「スイカの種、庭のほうに飛ばしていい？」

「やめておけ」

庭に飛ぶのは一向に構わんが、俺のほうに飛んでくるのが目に見えるからな。紗帆の辞書には、コントロールという文字は載っていないだ。

「だって、種飲み込んだらどうするの？ おなかから芽が生えちゃうんですよー」

「あ、おまえ、昔そう言っただましたる！ 俺は自分の体が人外のものになってしまっくんじゃなかった、かなり真剣に悩んでたんだからな！」

まあ、本気で怖がる俺を紗帆がなだめてくれたおかげで、トラウマにならずに済んだんだけどな。今やスイカは俺の心の恋人だ。

「あははは、みーさんばかだねー」

「んなる……」

俺を怒らせるやつはこうだ。片手で紗帆の頭をわしづかみにしてやる。

「わあ、収穫されちゃった」

俺の手の下で、紗帆はのんびりとされるがままになっていた。

「収穫ねえ。夏にはこんなもんが採れるのか」

「はい、主にみーさんち付近でよく生えていますー」

「これ食つともれなくお前みたいに、へによつとした話しかたになるのか？ 毒キノコみたいだな」

「へによつとした話しかたなんて、してないもんー」

「してるもんー」

仕草を交えて紗帆の真似をしてみる。うわ、俺の声、気持ち悪い。

「うっつ……」

口をへの字に曲げて、紗帆はすねてしまった。

ガキくさいことをしてしまった、と少し反省する。やっぱり頭ん中は幼児なのか、俺。

紗帆と目が合う。紗帆はまだ怒っているらしく、ふい、とそっぽを向いた。髪がふわりと揺れて、顔にかかった。

やわらかい紗帆の髪感触は、まだ手の中に残ってる。

もつと、触っていたかったかもな。そんなことをぼんやり考えていると、紗帆の喜々とした声が聞こえてきた。

「ふふふ、みーさんめ、油断したなー」

紗帆は逆襲の機会を狙っていたみたいだ。どこからかむしってきた雑草を、俺の頭に乗せようと手を伸ばしていた。当然、俺はよける。すると、なぜか紗帆のほうがバランスを崩し、体が後ろに大きく傾いた。

「あぶねっ」

窓枠にぶつけそうになる紗帆の頭を、あわてて抱える。肩のあたりで、驚いた紗帆のくぐもった声が出た。

一呼吸置いてから、俺は紗帆の頭を放した。髪に触りたいと思ってた俺の願望は、ずいぶん早く叶えられた。他にも、違うところに触れてしまったわけだが。

「びっくりしたあ。ありがとみーさん」

「頭突きで窓へこませるところだったな」

「そ、その前に頭のほうがへこんだかも」

「もうへこんでんじゃね？　今まで散々転んできたからな」

「ええーいやだー」

紗帆は頭をぺたぺたと触って確認している。そんな様子を見ながら、俺はさっきの感触を思い出していた。

やわらかいのは髪だけじゃなくて、肩もかよ。

最近のこいつは、どこもかしこもやわらかくて参る。そんな細いのに、どういう体の構造してんだ。わけがわからん。暑いせいで余計に変になるだろ！ 俺が！

「ああ畜生！ 大福もちかよ！」

抑えきれない感情が、思わず口をついて出てしまった。突然叫びだした俺を、紗帆は目を白黒させながら見ている。

「うわあ、みーさんが暴れ出した。そんなにおもち食べたいの？」
何とか自制心を取り戻した俺は紗帆に向きなおり、短く答えた。

「いや、大福はそんな好きじゃない」

紗帆はかくつとコケるポーズをとった後、

「みーさんという人がよくわからなくなってきました」
神妙につぶやいた。何だよ。

「俺にとってはお前のほうが理解不能な生き物だよ」

主におかしな言動と、やわらかいところが、な。

第六話

皿にはスイカの皮だけが残され、俺たち二人の腹が満たされたころ、突然、電話のベルが鳴った。

「ちよつと出てくる」

「うん、いつてらっしゃい」

紗帆に見送られながら、俺は電話の置き場所であるキッチンへと向かった。家の電話が鳴るのは珍しい。

もしかして。俺は、ある人物の顔を想像した。軽く深呼吸をし、受話器を取る。

聞こえてきたのは予想に反して、テレフォンアポイントの流れのようなセールストークだった。

「はい。え？ あ、うちはもう入ってるんで。はい、はい」

俺は必死に相手の巧みな勧誘をかわし、電話機のフックを押さえた。

「プロバイダの加入案内だよ」

言葉と一緒に、ため息が出た。俺は肩透かしを食らったような気分です話器を見ていた。

まったく、びっくりさせやがる。

「……なんでびっくりするんだよ」

親父からかもしれない、と思ってたからか。メールを放置したから、こつちの電話にかかってきたんだと期待して……ん？ 期待して？

俺、期待してんのか？

「みーさん」

「うわあっ」

急に後ろから肩を叩かれ、俺は間抜けな声を出してしまった。

振り向くと、口をポカンと開けたままの紗帆が、両手を上げたままそこにいた。

「何だよ紗帆かよ」

「うん、わたしだよー。って、わたししかいませんよー。みーさん、電話終わってるのに動かないから、心配になっちゃった」

「ああ、そうか」

受話器を握ったままだった。定位置に戻る。

「では部屋に戻りましょー」

紗帆は俺の背中を両手で押した。体重かけるなよ。

「あれ、そーいや片付けしてねえ」

「わたくしがやっておきましたですことよー」

「そっか、悪いな」

相変わらず気がきくなあ、紗帆は。

「いつかどっかに嫁にいつても、意外と大丈夫かもしれんな。紗帆なら」

「……どっか？」

俺の背中を押している紗帆の手から、急に力が抜けた。ぽつんと俺の言葉を繰り返している。

「ん？ どうかしたのか？」

「ううん、なんでもないよ。ふふ、わたしは嫁なんかいかずに、ずっとこうしてみーさんと遊んでたいな」

「俺はいつもお前に遊ばれてるような気がするぞ」

「あはは。じゃあ行こー。みーさんの部屋で何もしない日を再開しよー」

紗帆はまた俺の背中を押し始めた。細いのに力あるな、紗帆。

「わかったから押すなって」

「おーしくーらまーんじゅー」

子供っぽい口調で、紗帆が歌いだす。あんな、お前は高校生だぞ、今年で十七歳だぞ。わかってるか？

「おいこら、それは寒い日にするもんだぞ。今、まんじゅうにされたら暑さで泣くぞ」

「みーさんまーんじゅー」

「すでになってんのかよ」

「おーいしーくなーさそー」

「余計なお世話だっつーの」

紗帆の甘ったるい声が、妙に耳になじんだ。

心のささくれたところを丸くしてくれるような、そんな声に聞こえた。何でだかわからんけど。紗帆のやつ、マイナスイオンでも出してんのか？ ぼんやりふにゃっとしてるのは、伊達じゃないということが。

考えながら部屋へ向かっていると、背中の方から小さな声が聞こえてきた。

「紗帆、何か言ったか？」

「ううん、なんも言っていないよー」

「なら、いいけど」

気のせいかな。今、紗帆の声で、「だいじょうぶ」とか何とか、聞こえたような気がしたんだけどな。

俺たちは再び部屋に戻ってきた。

部屋に入ったと同時に紗帆はクッションに倒れ込み、満足そうな声を上げた。

「ふう。食べた食べたー」

「俺よりこの部屋の主っぽいな、お前」

「おや、みーさん、わたしの部屋にようこそー。ささ、てきとーにくつろぐがよい」

「おい」

突っ込みながら、俺も紗帆にならって横になる。

「おいしかったなー、スイカ。今日の占い二位だったけど、当たってるかも」

うつぶせになり、足をぱたぱたと動かしながら、紗帆はのんびりとそんなことを言っていた。平和だなー。

「そんなことで運勢いいことになんのか？ お手軽だよな」

まさに至福、という顔をしている紗帆は、俺の意地の悪い言葉なんて聞いてちゃいない。

「ちなみにみーさんは十位」

「……やっぱり聞いてたのか？」

「悪い運勢なら知りたくねえよ」

「あ、でも、それはテレビのほうだよ。携帯の占いは、もうちょっと良かったかも」

「そう言えば、携帯……」

見ないようにして、それでもついつい目が行ってしまふ携帯。新着メールはまだ、確認しないままだ。

「みーさんの携帯、取ろうか？」

首を傾げて、紗帆が聞いてくる。

「何もしない日はどうしたんだよ」

「いいじゃん。ちょっと見るだけなんだしさー」

「お前な。結局ルールもへったくれもありゃしないじゃないか」

「へへへー」

紗帆は笑いながら、華麗に横転がりをして携帯電話を取りに行った。よつぽど気に入ってたんだな、手巻き寿司。

華麗に転がり戻ってきた紗帆から、携帯を受け取る。

何時間かぶりに、手に取った。さっきは携帯見ただけでやる気が根こそぎ奪われてたけど、今はだいぶましになってる。

でもまだ開く気にはなねず、手のひらでもてあましていると、

「メール、きたでしょ」

紗帆が、静かな声で問いかけてきた。

「おじさんから」

一瞬、時間が止まったような気がした。

第七話

「……なんで知ってたんだ？」

虚をつかれた。名探偵も真つ青の切り出しかただ。

紗帆は静かな声のまま言った。

「みーさんがおじさんからのメール読もうとして読めないとき、いつもそんな風に携帯放り投げてるもん」

「そうなのか」

よく知ってるな。自分では全然わからなかったぞ。

「でもね、みーさん、そんな風にしながらも、ホントはおじさんのこと、気になって気になってしょうがないように見えたんだ」

「そう、だな」

「うん」

俺は腕を上げて、自分の顔を隠した。なぜか今の顔を紗帆に見られるのは、恥ずかしいような気がしたから。

「俺、かつこ悪い」

「どうして？」

「ガキみたいだから。いつも一人にさせられてることを、すねてるだけって気がして」

だから、親父から久しぶりに「元気か」という件名のメールが来ても、素直に読むこともできない。

どうしても、母さんが死んだときの親父を思い出すから。話しかけても何も答えてくれない、あの親父を。

その後、母さんのことが少しずつ薄れていっても、やっぱり親父は自分の世界に閉じこもってるように見えた。夕飯の時には会話一つ振ってこない、融通の利かない人のままだった。

今なら、親父の気持ちを多少はわかってやれるような気がする。

でも理屈でわかってても、割り切れない気持ちがある。小さいこと気にしてるって自分でも思うけど。

「そう……」

紗帆は俺の気持ちに名前をつけたりはせず、黙って聞いてくれた。

カーテンのすき間から差し込む光は、紗帆の髪の毛の輪郭をやわらかく縁取っている。その光をまとったまま、紗帆はささやいた。

「どんなに変でも、みーさんはみーさんだからね」

「なんだそりゃ」

「ひーさんでもふーさんでもなくて、みーさんだからね」

「何でそんな変な名前になるんだよ」

ひい、ふう、みい、って数のかぞえかたかよ。今気づいた。

「だから、だからね、今のそういうみーさんも、全部ホントのみーさんだから、わたしは、かつこ悪いなんて思わないんだよ」

ちよっぴり恥ずかしそうな笑顔を向ける紗帆。何だろう、紗帆の言葉がワントンポ遅れて、ようやく俺の頭に浸透してきた気がする。

「えっと……わかった？」

やっと、わかった。紗帆は、俺の心を楽にしてくれようとしてたんだ。

なのに気がつかずに、なんだそりゃとか言ってますまん、紗帆。

俺も笑って、うなずいた。多分、ちゃんと笑えてるはずだ。

「ああ、わかった」

「えへへ、良かった」

今日一日、ゆっくりと自分の中のもやもやを見つめられた気がする。頭ん中の引き出しから、自分のまとまらない考えをひとつひとつ取り出して、眺めて。その作業をしているとき、隣に紗帆がずっといてくれた気がする。

まあ、ホントにずっと、いてくれたただけだな。バカ話ばかりして、アホなことばかりしてな。

俺たちはしばらく、何も話さないまま、ただじっとしていた。『何もしない日』だから、という意図もなく、ただ自然にそうなって

いた。

自分のことがもつと冷静に見えてきた気がする。たぶん、俺はガキで。親父も多分中身はガキで。わからないことが、見えてきた。頭が冷えたせいかな、手の中の携帯電話に目が向く。今なら、もしかして話せるだろうか。素直な気持ちで。

「あつ」

いきなり紗帆は起きあがった。

「わたし、ちよつとだけ出かけてくる」

「なんだよ。何もしないんじゃないのか」

「それはちよつとお休みー。だからみーさんに百ポイントをプラスしよう」

いきなり休止宣言をされて、よくわからないまま、俺は身を起こした。どうしたんだ？ 急に。

クッションを片づけている紗帆は、髪がボサボサになっている。

細く、天然ウエーブがかかった髪は、あちこちに向いて自己主張していた。おいおい、その頭で外に出るつもりか？ ダメだろ、女の子として。

「じゃあ、紗帆の負けだな。罰ゲームだ」

「え？」

「ちよい、座れ。頭、直してやる」

俺は自分の前の空間を指さして、紗帆を呼んだ。

「わ、嬉しい。可愛くしてね」

「罰だからメデューサだぞ」

「ふふ、みーさん、そんなこと言うだけで、変にはしないでくせに見透かされてる。何か、くやしいな。

「クラスの子が言ってたよ。彼氏がみーさんに髪切ってもらったんだって。そしたら、すごーくかつこよくなっただって」

「ああ、あいつか」

確か、美容院行く金がねえって泣きつかれたんだよな。

「それでね、いつの間にか、みーさんに髪切ってもらったら恋人が

できるってことになつてたよ?」

いつの間にそんな噂が。

「ほほう、何か金稼げそうな予感がするな。カットでひとり五百円取れるかな」

「うわー、ぼつたくりみーさん」

「やつぱだめか」

金なんかもらえなくても、髪をいじって人に喜んでもらえるのは、嬉しい気がするがな。

「でも、わたしなら」

「え?」

「わたしなら、五百円払ってもいいよ? みーさんに切ってもらいたいなあ」

本心から、紗帆はそう言ってくれているように聞こえた。

なんだよ。今日は俺を泣かせたい日なのか?

もともと紗帆の髪にさわりたくて、美容関係に興味持った気がする。どんな理由だよ。いや、こんな理由でも、いいのか。俺が嬉しくて、相手も喜んでくれるのなら。

そうだな。進路、まだ美容師って決めたわけじゃねえけど、いろいろ調べて、考えてみてもいいかもな。

手持ちの道具は少ないけど、髪を留めるピンなら何本か持っていた。紗帆のはねていたサイドの髪をねじって、まとめて留めてやる。

「できた」

「わーい、ありがとー。ねね、これで町中の人が振り向く?」

「……その辺のガキなら振り向くかもな」

本当に思ったことは教えてやらないことにした。

紗帆はキョトンとした表情をして、次には顔いっぱい笑った。

「そっちのほう嬉しいかも。お子様カモンですよ」

お子様ね。お前に幼児認定されてる俺も、振り向いていいのか?

紗帆は身軽に立ち上がると、

「ええと、わたし、一時間は帰らないから」

なぜか帰宅時間の予定を宣言した。
ん？　なんでわざわざ時間を言っただ？

紗帆は不思議そうにしてる俺に手を振って、部屋を出て行った。
今日はホントに紗帆に世話になったな。感謝しないと。
俺のゲームのセーブポイントを、もう一つ貸してやってもいいな。

第八話

「風が、涼しかった。」

暑さのピークは過ぎたらしい。風はカーテンを揺らして、蒸し暑かった部屋の空気を変えてくれていた。

だるかった気持ちが風と一緒に流れて、消えていったように思えた。

俺は思い切って、新着メールを確認する。親父からのメールをやっと開くことができた。

本文は、いつものように短かった。

メシ、食ってるか。

「それだけかよ」

思わず苦笑した。いつもの俺ならすぐ消去しそうなメールだ。でも……

……たぶん、さ。ちょっとしたことなんだよ。人って優しい言葉の一つかけられただけでも……

なんで紗帆の言ったことが今、頭に浮かぶんだ？

俺は、携帯のアドレス帳から目当ての番号を探しだし、発信ボタンを押した。親父は今、外回り中かな。一人で行動してる時なら出てくれると思うんだけど。

三回目のコールを待たずに、親父は出た。

「……ああ、親父？ 俺だけど」

「充か？」

「メール、届いた。どうも」

『珍しいな、電話してくるなんてびっくりした』

なんだか、急に自分が恥ずかしいことをしてる気になった。

「じゃあ、切るうか」

うわ、何言ってるんだ俺。せっかく電話したつーのに、思わず……後悔しかかったとき、親父の慌てた声が聞こえた。

『いや、待て。相談があつたんだ』

「相談……親父が、俺に？」

何か、調子狂うな。俺が電話切ろうかなんていったら、黙って向こうから切りそうな親だと思つてたけど。

『母さんのところに持つていく花な。いつも菊ばかりだけど、他の花でもいいんじゃないかって……』

「……そんなことでメールしたのか？」

『……悪い、切る』

「ちょ、待てって」

話しながら思った。俺らはもしかして、似た者親子つてやつなのか？

多分、俺も親父も同じような考えかたをしてるんだろう。だから気に食わないことも多かったのかもしれない。

どんな花がいいか、しばらく談義をつづけたあと、俺は自分のことも言おうかと、ふと思ひ立った。

言いたかった言葉は、意外とすんなり出てきた。

「あのさあ、親父。今度進路相談会があるんだけどさ……」

親父とこんな風に話すきっかけを、ずっと待ってたのかもしれない。

電話を切ると、とたんに静寂が訪れた。それは心地いい静寂だった。

「『何もしない日』なのに、何か、しちまつたな」

俺はそつと含み笑いをした。

電話の余韻に浸っていると、突然、騒々しい声が玄関を襲撃した。『ぴんぽーん、ぴんぽーん』

間違えようもない、紗帆の声だ。ええい、だから口でインターフォンを演じるなって。

鍵はしていなかったが、今回はサービスしてやろうと、玄関のド

アを開けてやる。

「ねえ、駅前のメモリ特売、ホントに今日だったよー。心やさしいわたしが買ってきてあげたぞよ。感謝するがよい」

扉が開くやいなや、紗帆は俺のほうにパソコンショップの袋を掲げ、得意げにこう言った。

「え、あ……サンキュ」

勢いに押され、とりあえず礼を言う。俺が言ってたこと、覚えてくれたのか。

「それとねそれとね、アイスも買ったんだ。冷やして、あとで食べようね」

「お前まだ食うのか」

「食いますともー」

せつかく買ってくれたのならと、アイスを冷凍庫に収納しに行く。ついでにキッチンで紗帆に麦茶をふるまってやった。外は暑かっただろうしな。

「あれ？ みーさん、何か嬉しそうだね」

うまそうに喉を鳴らして麦茶を飲んだあと、紗帆はいたずらっぽい顔で、俺の顔を下からのぞきこんだ。

まったく、急に至近距離で人の顔をのぞくなよ。心を読むなよ。

俺はまだ、色々取り繕う準備ができてないんだから。

取り繕う……か。俺は自分の考えを改めた。取り繕うことなんてないのかもな。ホントは。

今ここにいるのは、俺のことならなんでも知ってる、紗帆だけだ。

「俺、電話した」

短く紗帆に伝える。それだけで、紗帆には通じたみたいだった。

「そっかあ」

紗帆の表情がゆつくりと明るくなる。花が開くみたいに。

「おじさん、喜んでたでしょ」

「どうかな。母さんの墓に供える花は菊以外で何がいいか、だってさ。どーでもいいことでメールしてくんだ、親父」

「どーでもいいなんて、思ってないくせに」

紗帆は、目を細めてやわらかく笑った。その目に何でも見通されてるようで、ちょっとどきまぎした。何で俺の考えてること、わかるんだよ。

「俺が電話することわかってたから、急に出かけたんだろ。帰る時間まで予告して」

ふと思いついて、紗帆を探るように見つめてみる。紗帆は小さく首を振って、あわてて言った。

「まさか。そりやそうなればいいなあとは思ってたよ。でもわかってるわけじゃなかった。わたしもおじさんとメールしてたけど、みーさんのことは、何にも言ってたし」

「え？ 親父、息子を差し置いて紗帆と連絡してたのか？ いつの間」

驚きだ。あの面白みのない親父が、紗帆とどんなやりとりしてたんだ？

「前におじさんがこっち帰って来てたときね、メアド教えてもらったんだ。きれいな花が咲いてたとか、こんな面白い人がいたとか、そういうことをメールで送り合ってたよ」

「へえー……」

親父も、もしかして寂しかったんだろうか？ 肝心の子供は親に對して無愛想だしな。許せ、親父。あんたの遺伝子がそうさせるんだ、仕方ない。

「電話のことはね、みーさんが携帯のほうばっかりチラチラ見たから、なんとなくおじさんに電話したいのかなって思っただけだよ」

「名探偵紗帆だな」

「えへへ、推理じゃないよー。わたしの念が届いたのかも」

「念って？」

「みーさんが電話できるようになりますようにって。きっと大丈夫、っていう念をね、今日ずっと送ってたんだー」

そう言えばさっき、だいじょうぶとか何とか、かすかに聞こえて

きてたけど。あれ、気のせいじゃなかったのか。念って言うか、口から漏れまくりだったぞ。

「お前、アホしながらそんなことしてたのか、器用だな」

「ひどーい、アホ言うなー。わたしは、いつつもみーさんのことを考えてですねえ」

「わかってるよ。サンキューな」

ホントに、紗帆にはかなわねえな。いつも何だかんだで助けられる気がする。

俺は今日一日で、少し変わったかもしれない。ほとんど何もしなかった、この一日で。

もしそうなら、それはきっと紗帆のおかげで……。

俺は、最後まで考えるより先に、手を伸ばした。

さっき整えてやった紗帆の頭を右手で抱え、俺の胸に引き寄せ。勢いでつんのめりそうになった紗帆をそのまま、つぶさない程度に抱きしめた。

第九話

何か、思い切ったことしちまったぞ、俺。

これからどうなるのか自分でもわからない。紗帆はどう反応するかな、と腕の中の様子をのぞきこむ。

紗帆は瞬きをして、首をしきりに傾げていた。いまいち分かっていない様子だ。

「どうしたのー？ まさか、おなかすいたなんて言うんじゃないよね？」

「は？ 何言ってるんだ、こいつ。」

「なんでそうなるんだよ」

「ええと、わたしの頭のこのあたりが、ツイストパンに似てるからさつきまとめてやった髪を、紗帆が指さしている。」

……そういう解釈もあったか。あの、ねじってある長いパンだろ。確かに。

「俺はチョコレートツイストが好きだ」

「わたしはカスタード。アイスより、そっちを買ってくればよかったかなあ？」

「って、脱線してる場合じゃないんだよ、今は。」

「別に、腹が減ってるわけじゃない。ただ、もうしばらくお前と一緒にいたくなっただけだ」

「へえ……ええ？」

紗帆は返事の途中で気づいたようだ。顔を赤くして、何やら謎の言葉を発している。

「親父に電話できたの、お前のおかげだ。ありがとな」

「え、なに、へんだよー。そんな殊勝なこと言うみーさんなんて殊勝なのが変わって、普段どんだけ傍若無人なのかという誤解を招くじゃねーか。つか、変なことばかり言ってるのはお前だろ。」

まっすぐ見つめると、紗帆の顔がますます赤く染まっていく。俺

は、自分もそんな顔してんだろうなと思しながら、再び話し出す。言葉は、思ったよりするりとでてきた。

「ずっとさ、昔っからずっと、俺、紗帆のこと好きだったんだ」
あれ、俺って昔から紗帆のこと好きだったのか？

知らなかった。口に出しても違和感が全くないから、間違いなくそういうことなんだろう。いや、無意識って恐ろしい。

逃げ出したくなる気持ちを抑え、しかし期待まじりで紗帆の言葉を待つ。すると。

「なななんと！」

口をまん丸に開けた紗帆は、妙なポーズで固まっていた。

もう、ここまでのちよっといいい空気、台無し。俺は長いため息をつき、肩を落とした。

「……もうちよっときさー、ましな反応しようぜ。頼むよ」

「じゃあ、なんですとー？」

「おんなじだっつーの」
俺にツツコミを受けた紗帆は、真っ赤な顔で左右を見回している。誰もいないって。

「い、以上、可愛いわたしの照れ隠しでした」

そして小さくペコリと頭を下げる。一言ギャグ劇場は終わったらしい。

「自分で可愛い言うな」

紗帆の髪をひと房、手ですくう。

やっぱりこいつの髪、いいな。触つてると安心する。

「も、もう、わんこじゃないんだから、もふもふしないでよ」

紗帆はちよっとなんか困ったような顔で、落ち着きなく視線を動かしている。

「返事によつてはもっと、もふりまくってやる」

「返事？」

俺はがっくりとうなだれる。

「あのなあ、俺は恥ずかしさをこらえてその……言っただぞ。な

んだよ、ガン無視かよ」

多分今日の夜中あたりに、自分の言った言葉を脳内で反芻して悶え苦しむんだ。そんな光景まで簡単に想像できるんだぜ。

紗帆はあわてているようだ。無意味に腕を振り回してる。壊れたんじゃないだろうな。髪の毛は直せても、他のところは修理できないぞ。

「わわわ、あの」

「はい、笑えないポケ禁止」

「まだ言ってないよー」

「てことはこれから言うつもりだったのかよ」

はあ……話が一向に進まん。こりゃダメなのか、俺これからどうしよう、といいかげんあきらめかけたところへ、

「えーと、あの、わたしも、だよ。たぶん」

小さな声の返事が、うつむいた紗帆のほうから聞こえてきた。

「なんだよ多分って！ 最後で落とすなよ」

「だって」

さらに突っ込みを入れそうになったとき、ふと、口元に添えられた紗帆の腕が震えているのに気がついた。さらに肩まで震え始めている。

「紗帆。おい、紗帆」

心配になった俺は、紗帆の肩に両手をかけ、様子をうかがった。すると。

紗帆は泣いていた。

瞳で受け止めきれない涙が次から次へとあふれていて、真っ赤な頬を濡らしている。

「……」

意表をつかれて、言葉も出ない。

え、何がどうなってんの。俺、どうすればいい？

自慢じゃないけど、こういう状況で女の子に泣かれたことなんて一度もないんだ。そもそもこういう状況になったことさえ、一度も

ないんだ！　うわ、ホントに自慢じゃねえー。

ちよつとの間呆然としてしていると、紗帆はいつもより激しい口調で言い返してきた。

「わかんないもん。わかんないけど、みーさんが変なこと言うから、心臓が痛いよ。どきどきして止まらないよ。どうしてくれるのよー」

「え……っ」

顔がさらに熱くなるのを感じる。

それはつまり。紗帆も俺のことが……って解釈して、いいんだよな？　いいのか？

紗帆の言葉を聞いて、俺だって恥ずかしさが止まらんぞ。暑いぞ、しかし。

「ばかばか、みーさんのばかー！　なんでいっつも、わたしをこんな気持ちにするの」

小さな子供のように全身で泣きながら、紗帆は俺に文句を言っていた。

「みーさんなんか、みーさんなんか……ええと、なんだろ」

いい文句が思い浮かばないらしい。紗帆は泣きながらも考え込んでいる。可愛いやつめ。

「好きなんだろ、たぶん、だけどな」

思い切って、自信過剰なことを言ってみた。

「その言葉、嫌い。胸がぎゅって痛くなるから、嫌い」

紗帆はいやいやをして、涙を俺のシャツにこぼし続けている。

「でも、みーさんはきらいじゃないー。その反対ー」

あ、そうなの？　それ聞いて安心した。実はちよつと不安だったんだ。

「はいはい、光荣っすよ」

俺はもう一度、紗帆をそつと抱きしめる。こわれないように、そつと。今度は、紗帆の手がおずおずと、俺の背中にまわされるのを感じた。

そして、もつと遠慮がちに、紗帆は口を開いた。

第十話

「……ごめん。わたし今、ヘンなやつだった、よね」

「平気だ。お前が変なのはいつもだからな」

「ええー、みーさん、ひどいなあ」

紗帆は目をこすり、ちよつとだけ笑った。でも、まだ口元はまだ泣きたいのをこらえてるように歪められている。

「みーさんが言ってくれたこと、ホントに嬉しいよ。でも、嬉しいのとおんなじくらい、胸が痛いんだよ。いつからかわかんないけど、わたしも、す、すきだったから。でもみーさんはわたしなんか興味なさそうだったから、頑張っつていつも通りにしようって、思っつても、普通にしようっつて思えば思っつほど、苦しくつてしようがなかつて。わたし、わたし……」

最後は言葉にならないみたいで、かわりに俺のシャツがぎゅつと掴まれた。

紗帆の声は小さくて、途切れ途切れだったけど、紗帆の気持ちを俺に伝えるには十分だった。聞いているこつちまでつらくなるような、そんな気持ちる。

「そつか……ごめんな。ごめん」

俺は何て言っつてやればいいかわからず、ただ謝つた。

「うっん……」

首を振ると同時にまた、紗帆の目から涙が流れた。もうこつなつたら、すでに結構な水分を吸収してこのシャツで、紗帆の涙をすべて吸い取っつてやろう。そう決めた。

気づかなかつた。ガキのころから全然変わりなくバカやつてる俺たちだと思っつてたけど、いつの間にか見かけも考えかたも、こんな違っつてきてたんだな。

紗帆をなだめながらも、俺の心の中はまだ驚きでいっつぱいだつた。俺が好きだつて言っただけで、こんな顔、するのか。

紗帆も、こんな風に泣くことがあるのか。

初めて見た。ずっとそばにいるのに、まだまだ紗帆について知らないことがたくさんあるんだ。

これからもっと違う顔を、知ることができるかもしれない。できれば、笑った顔のほうがいい。こんな風に泣かれるのは、もういやだな。俺まで胸が痛くなる。

明日から二人で過ごす時間は、きっと、もっと楽しいはずだ。そう思うと、何だか頬がゆるんできた。

気分を良くした俺は、紗帆のご機嫌を取ることにした。

『何もしない日』の功労者に対して、なんかお願い聞いてやるよ。何がいい？」

「本当？」

紗帆は目を真っ赤にしたまま、俺を見上げた。そんな顔されたら、多少の無理は聞いてやるうって気になっちまうな。まあ、ホントに無理なことはもちろんできないが。

「ああ」

「じゃあ、みーさんの頭、なでたい」

は？ 何だつて？ せつかく言うこと聞いてやるうってのに、そんな願い事なのかよ。泣いてても、紗帆はどこまでも紗帆っつーわけなんだな。

「ホントにそんなことでもいいのか？」

「そんなことなんかじゃないよー。わたしの夢だもん」

紗帆は握りこぶしを作って力説していやがる。

夢って、お前そんな、えらいくだらない……。まあ、いいけどさ。「……しよーがねーな」

俺はリクエストに応えるべく、自分の頭を紗帆に向かって下げた。紗帆の小さな手がやさしく俺の髪をかきまぜる。

「うわー、久しぶりだあ。ふふ、みーさんの髪、やっぱりぼさぼさだなあー」

くすぐりたい。少し恥ずかしいけど、紗帆が喜んでるから、まあ

いいか。

「いいこいいこ」

……やっぱり激しく恥ずかしいぞ。

「あれ？ やっぱり、みーさんは意地悪だから、わるいこわるいこ？」

「いい子でも悪い子でもいいから、早く終わらせてくれ」

「もう、せかささないでよー。今、癒されてるところなんだから」

まだ涙の粒が残った瞳で、紗帆が笑う。俺は、紗帆にくしゃくしゃにされた頭のまま、涙の最後のひと粒を指でぬぐった。

『何もしない日』的には、俺たち二人とも、ポイントマイナス千で失格かもな。

今日一日を振り返る。

今日は何もしないことから始まって、今まで気づかなかったことに気づいて、勇気を振り絞ってほんの小さなことをやり、心の中が大騒ぎして……

一生忘れないような、夏の日だった。

すっかり日は暮れて、庭では蝉にかわって鈴虫が鳴きだした。

もういつもの調子を取り戻した紗帆は、今は俺の隣で、街のガイドブックとにらめっこをしている。

「おいしいもの、食べたいねえ」

「何でもするって、とりあえず食い気なのか」

「とりあえず何も、いつでも私は食い気であふれんばかりですよ」

「なぜわざわざ腰に手を当て、胸を張って言う。」

「自慢にならねえよ。まったく、そんな棒みたいなたのどこに、大量の食い物が入るんだよ」

「なによー、棒じゃないもん。実は内臓脂肪がたくさん隠されてるかもしれないじゃんー」

「お前、それ皮下脂肪よりタチ悪いから」

どこに連れてかれるのか、少々不安だ。ケーキバイキングだけは勘弁してくれよ、と念を送っておく。あの女子ばかりの空間はどうにも苦手なんだ。俺はため息をついて、つまらなそうなふりをしてみた。あんまり浮かれた顔するのも、何かくやしいからな。

「ねえねえ、みーさん。ここのお店、よさそうだよ」

「どれ」

紗帆が指さしている雑誌のページをのぞく。

「ここでランチを食べると、イメージキャラクターのねこさんと握手できるんだよー」

「ね、ねこさん？ 飯食うのになんでねこさん？」

「だって、ねこさんのレストランドもん」

いや、それ答えになってんのか？ まさかコックが猫の着ぐるみに入ったまま料理するんじゃないだろ？ 衛生上。それにしても……

「なんてこった。ケーキバイキングを上回る苦行が、この世にはあつたつて言うのかよ……」

俺は背もたれにしていたベッドに頭を乗せ、天を仰いだ。

「え？ みーさん、ケーキバイキングのほうが良かった？」

「やめてくれ、どっちも勘弁してくれ」

「だめかな。わたし、初めての、その……デート、にはこういう可愛いところに行ってみたかったんだ。けどみーさんがいやなら……」

「……ちよ、待った」

何だよお前。何でそんな可愛いこと言うんだよ。ものすごい攻撃力だぞ。俺が断れるわけないだろ。

「わかったよ、そこにしよう。ねこでもコアラでもまとめてかかって来やがれ。握手してやる心の準備は今できたぜ」

「わー、嬉しいな。でもみーさん、着ぐるみねこさんの後頭部をチヨップしたりして、いじめたらだめだよ？」

「しねえよ!」

紗帆のほしゃいだ顔を見るためなら、どんなことでもしたくなる
自分がいる。

惚れた弱みってやつか? 恐ろしいな。

さて、これから親父にメールの返信でもしてやるか。

そして、紗帆に引つ張り回されることになる明日に備えないと。

何せ明日は、今日の『何もしない日』に続く企画、紗帆いわく『
何でもやってみる日』だそうだからな。

第十話（後書き）

誰かがきつと続きを楽しみにしてくれている、という思い込み（笑）
で、ここまで書き進めることができました。
最後まで読んでくださって、ありがとうございました！

「何もしない冬の日」その1

「今日はこたつでずっといるもん。外なんか出ないもん。わたしもう、こたつの子になる！」

俺の部屋にやって来るなり、こたつにずぼりとおさまった紗帆は、意味不明なことを口走っていた。

まあ、こいつがおかしなことを言うのはいつものことだ。俺は向かいでこたつにしがみつくように座っている紗帆をちらりと見ると、再び手元に目を落とし、読んでいる雑誌のページをめくった。

「いや、わけわかんねえから。俺んちのこたつをいきなり子持ちにするな」

無視するのともどろかと思っただので、一応紗帆にツッコミを入れておく。

すると紗帆は機嫌を損ねたのか、口を尖らせ、こたつの中で勢いよく足を伸ばした。当然、こたつの反対側から足を突っ込んでいる俺の足に当たる。しかも弁慶の泣き所いだ。

「痛えよ」

「あつ、ごめんねこたつさん、中で暴れて。意地悪なみーさんはどーでもいいけどさっ」

紗帆は味を占めたのか、にやりと笑ってがしがしと俺の足を蹴ってくる。楽しそうで結構なことだよ、全く。でもな、お前のふくらはぎの部分が俺のつま先に当たってたんだよ。俺はなんだか妙に落ち着かない気分になるんだよ。本当に勘弁してくれよ。

「これから出かけるんじゃないのかよ。言い出したのはお前の方だろ」

俺は自分の妙な気持ちを抑えるべく、取り澄ました顔で紗帆に尋ねた。そう、俺と紗帆はこれから二人で出かける予定だった。その

ために俺はいつものジャージじゃなくて、外出できる服に着替えるんだからな。まあ、見た目はこの服もジャージも、たいして変わらんけどな。

「……だって……そんな気分じゃないんだもん」

やっと、という感じで返事を絞り出した紗帆は、いつもの脳天気さとは程遠い、歯切れの悪い話し方をしていた。なんかあったのか？俺は雑誌から目を上げて、紗帆の顔をじつと見る。特に体調が悪そうには見えない。メンタル面で何かあったってことだろうか。

ちよつと不安になって、俺は紗帆から遠ざけていた足を戻し、紗帆の足の裏にぴたりと付けた。

テレビをつけてない室内は静かだ。BGMは、時折聞こえる紗帆のため息だけ。外も車の音さえ聞こえず、静かだった。

窓の外を見ると、ぽつりぽつりと、雪だかあられだかよくわからんものが降り始めていた。道理で静かなはずだ。外に出たら格別寒いだろうな。地面が凍ってるかもしれない。もしそうなら、滑らずに歩くのも一苦労だ。

でも、コタツでたらだら過ごしてる俺たちには関係ない。貴重なはずの俺と紗帆の高校二年の冬休みは、こうして無駄に消費されてくみたいだ。

俺、吉野充と、向かいで拗ねてる保田紗帆は、ご近所に住んでる幼なじみってやつだ。幼稚園から始まって小中高、思春期を挟んでも疎遠になることはなく、俺たちは幼なじみという名称に恥じないほどには馴染みまくってきた。

夏、その関係が変わったような気がしなくてもない。俺が紗帆に気持ち伝えてから……

「ぐあ……」

声を漏らして床に転がり、こたつ布団に顔をうずめる。思い出すんじゃないかった。半年近く経っても恥ずかしい。そりゃ、あのとき

言ったことを後悔なんかしてない。むしろ言っただけでよかったと思ってる。でも恥ずかしいもんは恥ずかしい。何で今日はこんなに暑いんだ。あれ、今って冬だっけ？

「みーさん、大丈夫？ どうしたの？」

心配そうな紗帆の顔が、俺を覗き込む。どうしたのと聞かれても、夏のことを思い出して悶えてた、なんて言えるわけがない。

「風邪でも引いちゃった？ 今日、寒いし」

紗帆の小さな手が、俺の額にふわりと当てられる。冷たい。

「ないだろ、熱なんか」

恥ずかしさのせいでつい、ふてくされたような言い方になってしまふ。紗帆はそんな俺の態度に気を悪くした風でもなく、小さく笑ってうなずいた。何ほっとした顔してんだよ。今はむしろ、俺がお前のことを心配してるんだっつーの。

それにしても紗帆の手、本当に冷たいな。こたつはまだ、紗帆の指先をあつためてやってないみたいだ。

なら俺がこたつの代わりにになってやるか。俺は起き上がると、紗帆の手を取り両手で包んだ。一番冷たい指先へ息を吹きかけながら、手をこすり合わせる。

紗帆はしばらく目を見開いてたけど、すぐに嬉しそうな顔になった。紗帆がほにやっと笑ってるだけで、暖房器具がいらなくらい暖かくなってく気がするから、不思議だ。いやまあ、気のせいなんだけどな。こたつがなければ俺は凍え死んじまう。

だいぶ紗帆の指先が温まってきたので、俺は手を離れた。「もう終わり？」なんてわがままをいう紗帆には、頭くしゃくしゃの刑を執行しておいた。

「ありがとみーさん。みーさんの手、あつたかいねえ」

「伊達にこたつと一体化してるわけじゃねえぞ」

わけのわからない返事をしてしまったのは、俺の照れ隠しかもしれない。しかしその意味不明な言葉に紗帆が食いついてきた。

「ええつ、知らなかった。みーさんが先にこたつさんの養子になつてたの？」

「お前、わざわざそこに話を戻すのかよ」

「うーん、子供になるの、だめかあ。じゃあねえ……これはどうだ」
紗帆はこたつ机の上で三つ指をつき、頭を下げる。

「お父さん、このこたつをわたしにくださいっ」

「嫁にもやらん！」

「これもだめ？ じゃあ何だったらいいのさー」

「予定通り出かければいいだろ」

「だって……今日はそんな気分じゃないんだもん」

「はあ、らちがあかん。大体、役割が逆じゃねえか？ いつもなら、早く出かけようって急かすのは紗帆の方だろ？」

「紗帆、なんか変だぞ。いつも変だけど、その変とは違う変だぞ」

「うわ、みーさん、変って四回も言ったー」

「議論するべきところはそこじゃねえ。外に出たがらない俺を無理やり引つ張ってくのが、いつものお前の役目じゃねーか。お前がそんなだと、今度は俺がお前を引つ張ってかなきゃいけないのか？ そんなの嫌だろ。面倒くせえだろ、俺が」

俺の自分勝手な言い分を聞いて、紗帆は呆れたような笑顔を見せた。「みーさん、ホントにめんどくさがりだよね」言葉と一緒に、肩にかかる柔らかい髪が揺れる。

「面倒ならさ、今日はずっとインドアでいいじゃん。ほらほらみーさん、みかんあげるからさー」

拗ねることから、俺を懐柔することへと方針を変えたらしい紗帆は、机の上のみかんを手に取り、俺の方に差し出した。こいつ、あくまで俺の部屋に居座ろうって魂胆だな。

「それはもともと、うちのみかんだ。ついでに言つと、このこたつもうちのだ」

むっとした顔で俺が答えると、紗帆は鼻歌でごまかしつつ、あさつての方角へ目を向けた。

俺はちゃっかりと紗帆から受け取ったみかんの皮をむき、一房口に放り込んだ。みかんもいいけど、果物はやっぱりスイカがいいよね……そんなことを思いながら、スイカがまったく似合わない真冬の空を、再び窓越しにちらりと見上げる。紗帆も俺と同じように、窓の外に目をやった。

二人きりの、静かな冬の日だ。

いや、二人じゃなくて、紗帆の里親候補のこたつもいるか。

「何もしない冬の日」その2

紗帆のやつ、今日は本当に出かけない気かね。まあ別にいいんだけどな。出かけるってたって、用事があるからってわけでもなく、ただぶらっと遊びに行くだけだ。

出かける予定だった場所は、ゲームセンターだ。色気の欠片もねえが、俺たちにとっては定番の場所だ。二人ともゲームが好きだから、自然とこうなっちまうんだよな。紗帆は俺よりも幅広くゲームにハマっていて、格闘やシューティングからUFOキャッチャーまで何でもこなす。前回レースゲームで紗帆に負けたから、今日はリベンジと行きたかったところだけど、それはまたの機会になりそうだ。

ぼんやりと考え事をしてるらしい紗帆を邪魔しないように、俺は何とはなしに携帯をチェックしてみる。ちょうど新着メールが届いたところだった。差出人は……また親父か。マメだな。

夏以来、俺は単身赴任で県外にいる親父と、頻繁にメールのやりとりをするようになっていた。それまでが疎遠だっただけに、何だかおかしい気分だ。まあ、別に悪い気はしないけど。親父は今度新調するネクタイの色をどうするかで悩んでいるらしい。本当にいつもしょーもないことで悩んでんな、親父。俺は何でもいいだろ、という突っ込みとともに、適当だと思っただ色を書いたメールを返信しておいた。

「みーさんの部屋って、いいねえ。わたし、ここにしていると安心するよ」

しみじみとした声に、俺は携帯から顔をあげる。さっきよりもくつろいだ表情になった紗帆は背中を丸めて、掛けているこたつ布団に頬ずりをしていた。

「そうか？ お前んちより寒いだろ、ここ。だだっ広い分、居心地はいいかもしれんが」

「うーんとね、広いからってわけじゃなくて……変わらなくていいなあって思ってた。みーさん、それほどお部屋の模様替えもしないし、こたつさんだって、このお家に来てから十年くらいになるよね？」

ほわほわとした口調で語っていた紗帆は、ここで急に声のトーンを落とした。

「でも、自分の家や外にいと、色んなことが変わってくの肌で感じちゃって、何だか不安になるんだよね……」

紗帆の浮かない顔の理由が、とうとうぼろりと出てきた。

「変わるのがいやなのか？」

尋ねた俺に紗帆はくりとつなずく。その素直さに俺は驚き、はつとして紗帆の顔を見つめ直す。

小さい頃から俺の面倒を見てくれた紗帆は、同い年にもかかわらず、俺にとって姉のような存在だった。いつも俺のことを気にかけてくれてるけど、自分のことはあまり語らず、笑顔で俺を見守ってる。何年も、紗帆はそんな風にそばにいてくれた。

それが最近になって、紗帆は自分の気持ち話してくれるようになった。俺はいまだに慣れてなくて、紗帆の素直な言葉を聞くたびに驚いてしまう。もちろん、嫌だからって意味じゃない。とても新鮮で……どちらかという嬉しい。ちょっとでも頼りにされてるんだなと思えるから、実のところ、かなり嬉しいと言ってもいいだろう。

紗帆が変わったのは、いつからだっけな。

やっぱり、あのときからだろうか。俺の告白に、紗帆が泣きながらうなずいてくれたあの日から……

俺は口の中で小さく呻いた。再び床に転がりそうになるのを、なんとかこらえる。また思い出しちまうのかよ。全く、あれから何か月も経つっていうのに、あの記憶は何て破壊力なんだ。俺の顔だけ真夏になっちまったじゃねえか。

恥ずかしい記憶を全力でごまかそうと、俺は冷静な振りをして紗帆に問いかけた。

「変わる、って言っても何か抽象的だな。具体的には？」

「うーんと、進路のこととか、かな」

唇に指を当て視線を巡らせてから、紗帆はやつと答える。自分の物思いを言葉に変換することが難しいみたいだ。

「進路？ お前、俺より決めるの早かったじゃねえか。まず大学で福祉を勉強して、卒業したらそういう仕事に就くんたる？」

意外な答えに、俺は驚いて聞き返した。実際紗帆は、昨年学校で配られた進路希望調査表を提出するのも早かった。唸りながら埋めようとしていた俺を尻目に、紗帆は悩むことなく三十秒で記入してたからな。

「うん、まあ、そうだよ。まだ具体的に決まってるわけじゃないけど、いくつか就きたい仕事の候補はあるんだ。そのために、大学には行くつもり」

「なら何を悩むんだ？ 最近になってやっと決めた俺と違って、前から進学って決めてるんなら、何も不安がることはないだろ。お前、成績だっていいし」

「へへ、みーさん、美容師さんの専門学校行くことにしたんだよね。わたし、みーさんはやっぱりそうするんじゃないかと思ってたんだ」

「あー、まあな。その節は心配かけたな……って俺の話はいいんだよ。今はお前の話だろ」

慌てて話の流れを修正する。全く紗帆のやつ、自分の悩みで手いっぱいなくせに、なんで俺の話になったら嬉しそうな顔するんだよ。そんな顔されると困るだろ。……何か、こそばゆいような気分になっちゃう。脳天気になつてるその頬を、触りたくなる。

俺が不可解な自分の気持ちと格闘している間にも、紗帆は不安の

理由をあぶり出そうと頑張っていた。

「うーん、うーん、どうなんだろ。わたし、ただ受験勉強が面倒で、ぐうたらしてただけなのかなあ」

「あ、お前、本家ぐうたら俺へ挑戦状を叩きつけたな。お前みたいに、ボランティアだなんだって忙しそうにしてるやつに、ぐうたらを語ってほしくないぜ。そんなのは付け焼き刃なぐうたらだ。俺と張り合うなら、冬休み明け、課題をページもやらずに学校に行き、しかも休みボケで昼間起きてられないから授業は全教科居眠り、くらいしてみるよ」

「う、うわあ……みーさん、清々しいくらいにぐうたら星人だねえ。わたし、みーさんにだらだらする方法を教わることにするよ」

そこまで言われちゃ、期待に応えないわけにはいかないな。

「いいのか？俺の修行は厳しいぞ。まず、離れたところにあるものを普通に立ち上がって取りに行ったりしちゃダメだ。あくまでこたつに入ったまま、這いずって移動するんだ」

「はいっ、師匠！」

手を上げて元気よく答えた紗帆は、こたつを住居としたヤドカリのような格好で、テレビのリモコンを取るために匍匐前進を試みた。俺は修行の邪魔をしないよう、こたつから出て紗帆を見守る。しかしまあ、こたつを引きずりながら這いずるなんて、普通に考えたらまずできそうにないことだ。つーか、普通ならやってみようとも思わないな、うん。

しばらくおかしな掛け声を発しつつ頑張っていた紗帆も、ようやくそのことに気付いたようだ。

「難しくできませんっ、師匠！」

紗帆はうつ伏せのまま、両手をばたばた動かしながら俺に向かって訴えた。

「当たり前だ。俺だってそんな高度なことできん」

「みーさんひどいよー。わたし、ぐうたらになるために頑張ったのに。背中が痛いよー」

紗帆は両手と頭を力なく床に落とす。すまん、同情はするが、今の紗帆、むちゃくちゃおかしいぞ。

「お疲れさん」

俺は厳しい修業を終えたことをねぎらい、紗帆の頭のみかんを乗せてやった。

「何もしない冬の日」その3

「ああ、いい汗かいちゃったつ。冬なのに」

紗帆は俺におちよくられたシヨックから回復したらしく、わざとらしく額の汗をぬぐう振りをしながら起きあがった。その拍子に頭の上のみかんが床にころりと落ちる。みかんを拾い、しばらく両手の中で転がしていた紗帆は、ふと頬をゆるませ、呟いた。

「なんか、嬉しいな」

「はっ？」

俺は思い切り、疑惑の表情を紗帆に向けてやる。こいつ、何言っただ？ からかった俺に腹を立てるんならわかるが、嬉しくなる理由がわからん。さすが紗帆と言うべきなのか。思考回路が力オスだ。

「お前、さっきの厳しい修行で頭がどうかしちまったのか」

「もー、何ですよ。変なこと言っていないでしょ、わたし」

「いや、変だつて。何がどうなったら嬉しくなるんだよ。あまりにも脈絡がなさすぎるだろ」

「だから、みーさんが一緒にアホなことやってくれるのが、嬉しいんだよう」

「正確に言うと、アホやってたのはお前だけだな」

間違いを訂正してやると、紗帆は頬をふくらませ、こたつの中で足をばたばたと暴れさせた。紗帆の足は狙いすましたように俺のすねにヒットする。またかよ。俺の痛がる顔を見て気が済んだのか、紗帆はにっこりと笑い、再び話し出した。

「みーさんとおバカなことしてる間だけは、わたしたち変わってないんだな、って嬉しくなっちゃうんだよ」

話してるうちに自分の気持ちとの折り合いがついたのか、紗帆はしっかりとした口調になっていた。

「変わっていきたい、先へ進んでいきたいって気持ちには、もちろんあるんだよ。受験勉強も、大学入ってから、その後だって頑張ろうって思う。でも、高校を卒業して、今まで知らなかった世界に行くんだって思うと、ちょっぴり怖い気もするんだよ。制服を着てないわたしを想像すると、それまで頼っていたものがなくなっちゃうような、心もとない気分になっちゃうの」

「そっいうもんかねえ」

紗帆の発言を吟味してみる。知らず知らずのうちに高校生、って肩書きに頼ってたってことか？ それなら少しはわかるかもしれない。俺だって、制服の集団に埋没するのは気が楽だって思う。勉強してなかったって、多少金を払って出席してりゃ、高校生でいることはできるもん。まあ、あまりにも勉強をサボってたら、留年することはあるかもしれないが。俺は納得した、という意味でうなずいてみせると、手を伸ばして、まだ少し不安げな紗帆の額をつついてやった。

「お前は真面目に考えすぎるんだよ。もっと見た目の雰囲気を裏切らないようにぼーっとしてろよ」

「わたし、ぼーっとした雰囲気なんかじゃないもん。できる人って雰囲気だもん」

「目を覚ませ。どっからどうみてもお前にそんな雰囲気はない。紗帆も、そろそろ現実を見つめてもいい年だ」

唇を尖らせた紗帆の、足ばたばた攻撃を再び食らう前に、俺は慌てて話を元に戻す。

「まあ、変わらないでいるのは不可能だ。何をどうしたって、高校を卒業しなきゃなんねえし、年も取る」

「うん……」

「でもな、俺らが年取ったって、こうして二人でいたらしてんのは変わんねえと思うぞ。この先俺が家を出て、どっか違う場所で住むとしたって、だからする場所が新しくなるくらいなもんだ」

「……うん」

「たまには何もしない日があったって、いいんだ。夏にはお前が俺にくれただろ、何もしないで、自分について考える時間を。だから今日は俺からお前にその時間をプレゼントしてやるよ。今日だけじゃない。また不安になったら、いつでも俺のところへ来い。俺がぐうたらしてんの見たら、きつと悩んでんのがアホらしくなると思うぞ」

「……」

沈黙のまま、紗帆はくしゃりと顔を歪ませる。それが泣く一歩手前の表情だと気づいて、俺はにわか慌てた。あれ、泣くようなこと、俺言っただけよな？ 急いでさっきの俺のセリフを頭の中で確認してみる。紗帆の涙は少なくとも、俺を混乱させる効果がある。

しかし紗帆は泣き出さず、意外な行動に出た。四つん這いになって俺の方へ突進してきたんだ。それも結構な勢いで。動き方がホラー映画に出てくる怨霊みたいでちょっと怖いぞ。しかも勢いをつけたまま俺の右肩に頭をぶつけてきやがった。

「だから痛えって」

「えへへ、早速来ちゃいました」

泣きそうだった雰囲気はどこへやら、開け放した笑顔になった紗帆は、俺をぎゅぎゅぎゅ押しこたつに入り、俺の隣で落ち着いた。「狭いだろ」

そう言いつつ俺は紗帆の肩を抱え、ゆっくりと引き寄せた。紗帆も逆らわず、俺の肩に寄りかかり、頭を預けてくる。力の抜けた、リラックスしている紗帆の様子が手のひらに伝わってきて、俺は何かあたたかいもので心が満たされるのを感じた。たったそれだけのことで、これからも紗帆の細い肩を守っていける、なんて気持ちになるから困る。単純すぎるだろ、俺。でも……悪い気はしない。俺はほんの少しだけ、紗帆の肩を抱く手に力を込めた。

外を見る。空はさっきよりも張り切って雪を降らせていた。俺た

ちが外出をキャンセルしたから、拗ねてるのかもしれない。でも悪いな。今日はもう、紗帆の手を凍えさせたりしない。せつかくさつき温めてやったんだからな。

ふと、肩が軽くなった。紗帆は俺の肩から頭を上げ、くるりと俺の方を向いた。その目はさつき泣きかけた名残で少しうるんでいたが、もう涙がこぼれそうな気配はなかった。

「手だけじゃなくて、みーさんは全部があったかいねえ。ぽかぽかだよ」

「俺は全身カイロなのかよ」

「ああー、またそんな嫌な言い方する。せつかく気持ちもあたたかいね、って言ってあげようとしたのにー」

「そりやどうもすいませんねー」

「わ、拗ねちゃった」

雪の降るリズムよりも心地いい紗帆の声を聞いてると、俺は本当の意味で安心することができた。紗帆、いつも通りになったな。紗帆の一喜一憂でこっちまで揺れるなんて、俺は相当、紗帆に頼り切ってるんだろう。俺は自分がしまりのない笑顔を浮かべているのを感じながら、ボケる紗帆へのツツコミを再開した。

ひたすらだらだらして、何もしないでいるくせに、なぜか胸には充実感。それからこたつに浸かりきってるみたいな温かい気持ちがある。変だよな、どうしてこんな気分になるんだ？

きつと紗帆がいるからだろうな。俺は素直にそう思った。恥ずかしがるうがなんだろうが、結論はそれしかない。隣で紗帆が笑って拗ねて、蹴って、ボケててくれるなら、何もしない俺たちの一日は、最高の時間になるんだ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1821f/>

何もしない夏の一曰

2009年4月8日13時30分発行